

二本松市消防団

消防団の法被を

纏うまじ



〓 消防は、その施設及び人員を活用して、国民の生命、身体及び財産を火災から保護するとともに、水火災又は地震等の災害を防除し、及びこれらの災害による被害を軽減するほか、災害等による傷病者の搬送を適切に行うことを任務とする。（消防組織法第一条・消防の任務より）〓

『消防団 集まれー』

指揮者がこの号令を発すると、一斉に駆け足で集合し隊列を組む消防団員たち。普段はそれぞれ別々の仕事をしている彼らだが、ひとたび消防団の法被を身にまとうと、たちまち一つのチームとなり、機敏な行動をとる。

記憶に新しい東日本大震災。岩手県では目前に迫る津波を前に、命がけで水門を閉めた消防団員たちがいた。消防団員たちの使命は、市民の生命・身体・財産を守ること。あのとき二本松

市内でも、家や家族を顧みず、地域のために昼夜を問わず駆け回った消防団員たちの姿があった。

消防団員たちを突き動かすものは何なのか。

〓 自分たちの地域は自分たちで守る〓これが消防団精神だ。しかしこれを実現するにも、一人では何もうできない。団員たちが勇気ある行動をとれるのは、他ならない、多くの仲間たちと一緒にだからだ。

今月号では、消防団員たちの活動を紹介しながら、消防団員になることで得ることが出来る『大切なもの』は何なのかを探ることとする。

◀写真は平成28年に発生した、実際の火災現場での消防団員による消火活動の様子。団員たちは、火災等の発生を火災情報メールやサイレンの音で確認すると、すぐに消防屯所へ駆けつけポンプ車等で現場へ向かう。平日はほとんどの団員が仕事をしているが、ひとたび災害が発生すると、仕事を中断してでも現場へと向かう。24時間365日、いつ起こるか分からない災害。団員たちのこの素早い行動が、災害による被害を最小限に食い止めている。



消防団とは。

二本松市では平成30年4月1日現在、1445人の消防団員が、各地区隊・分団に所属しながら活動しています(下の組織図参照)。

消防団活動は、火災発生時の消火活動にとどまりません。地震や台風、豪雨などによる大規模災害が発生しやすい「災害大国日本」では、いついかなる災害が発生するか分からず、地元のことを誰よりも知る消防団員たちは、これらの災害に備え、常日頃から万全の備えをしています。

仕事や家庭の合間を縫って、地域を守るための活動が続ける消防団員たち。ここでは、その主な活動内容などを紹介します。



消防団員とは

災害現場などで消防活動にあたる人員として、一般的には消防職員と消防団員がいます。消防職員とは常勤の地方公務員で、安達地方では、安達地方広域行政組合消防本部に勤務する職員のことをいいます。

一方、消防団員とは、普段はそれぞれの職業を持ちながらも、「自分たちの地域は自分たちで守る」という精神に基づき、災害発生時には自宅や職場から出動する人たちをいい、崇高な使命感にあふれたボランティアです。こうした地域の住民による消防団員によって構成されるのが消防団です。その身分は非常勤特別職の地方公務員で、身分は市の条例により定められています。災害現場では、消防職員と消防団員が互いに協力し合って活動しています。

消防団の活動とは

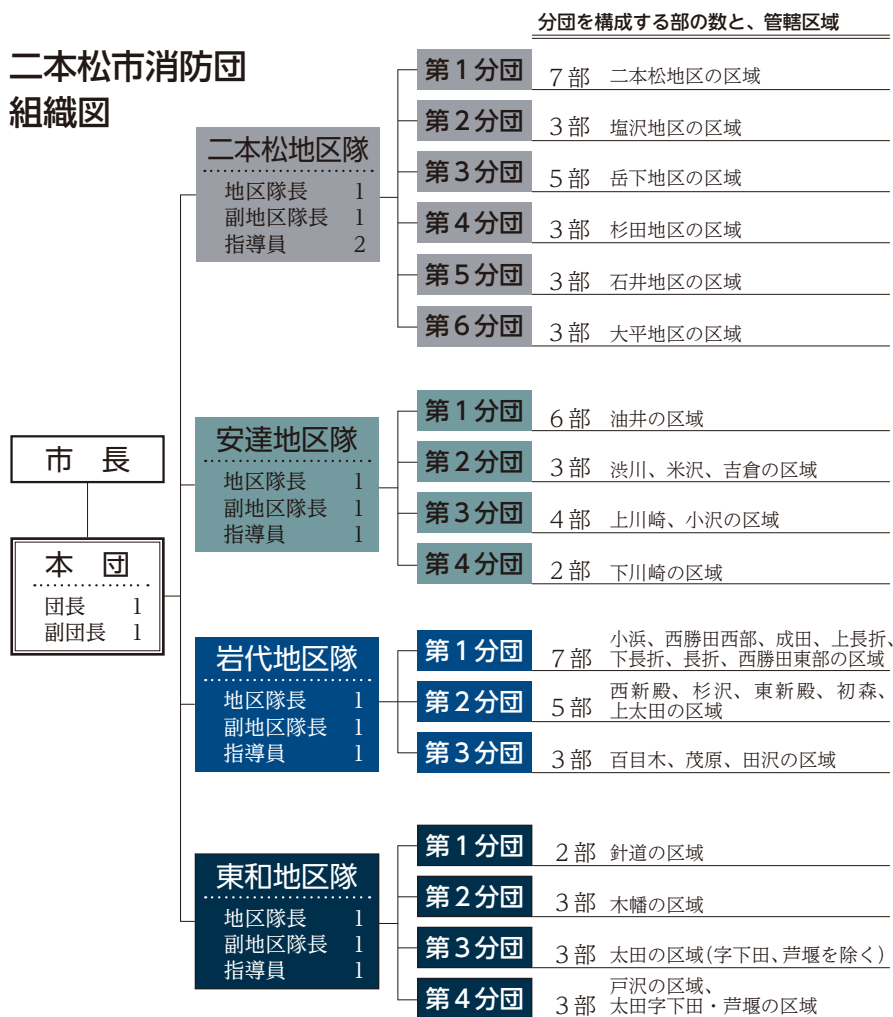
消防団の活動の中で一番重要な任務は、火災や台風などの災害時の活動となります。

まず市内で火災が発生した場合、市の防災無線や火災発生メールなどで火災発生を知った団員は、すぐに消防団所に集合、消防車両に乗り込み火災現場へ向かいます。そして消防署員と協力して消火活動を行います。

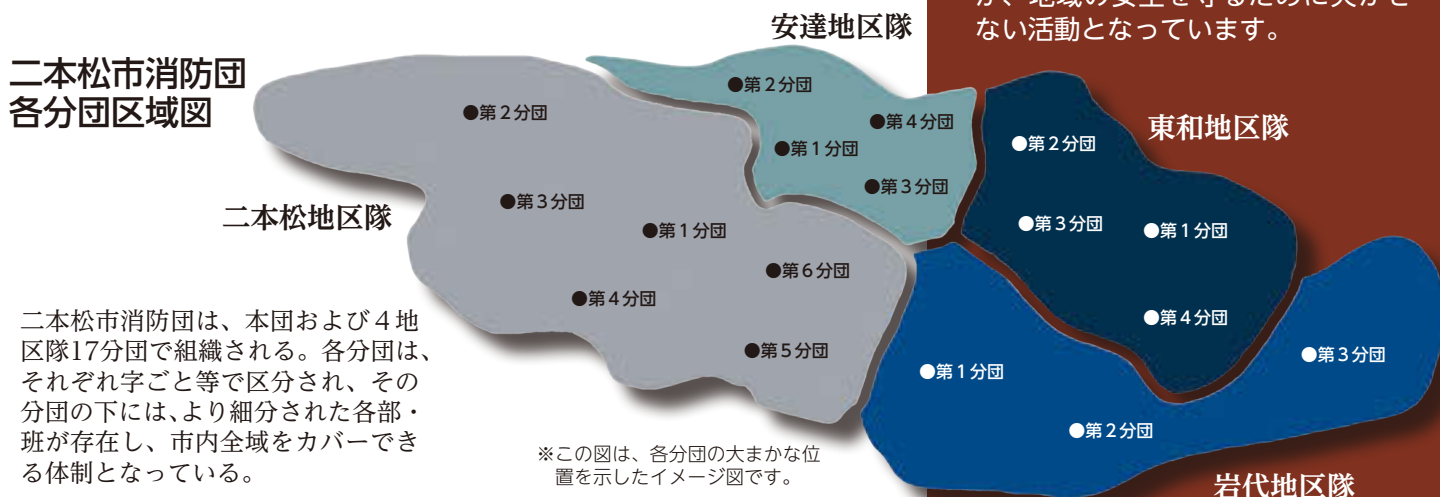
また、地震や大雨などの気象災害時や災害の発生が予測される場合は、昼夜を問わず、市内の危険箇所を点検しながらパトロールを続けます。

その他にも、火災や災害を未然に防ぐための広報活動などの予防消防活動や、万が一の災害に備えた消防ポンプの点検や中継訓練、団内の統制を図るための規律訓練、行方不明者の捜索など、消防団の活動にはさまざまなものがあり、すべての活動が、地域の安全を守るために欠かせない活動となっています。

二本松市消防団組織図



二本松市消防団各分団区域図



消防団の主な活動

4月

新入団員教育訓練

市内全ての新入団員が一斉に集合し、通常点検などの基本動作を確認する。



二本松市消防団春季検閲式
(H30.4.22、岩代総合グラウンド)

春季合同検閲

消防団最大行事の一つ。市内4地区隊の全消防団員が集結し、市街地を行進したりグラウンドで通常点検などを行う。場所は毎年各地区隊で持ち回りとなる。



安達地区隊で実施された合同中継訓練
(H29.6.18、あだち湖周辺)

6月

7月

中継訓練

各分団単位で行われる中継訓練。実際の火災現場では、水利から火点までの距離が遠いことが多いため、ホースを何本も連結し、実際の水出しを行う。各部・班の枠を超えて行われ、女性防火クラブによる炊き出し訓練なども行われる。



2年に1度開催される福島県消防操法大会
(H30.8.26、福島県消防学校)

8月

福島県消防操法大会

2年に1度開催されるこの大会には、県内各市町村から選抜された選手たちが、ポンプ操法などの技を競う。選ばれた選手たちは、大会の半年以上前から仕事の合間を縫って練習を重ねる。

9月

幹部教育訓練

毎年各分団の幹部が集い、消防署員の指導のもと、規律訓練などが行われる。

防災訓練

毎年行われており、地域の方や警察・自衛隊などが出そろって、実際の災害発生を想定した訓練が行われる。



出初め式で、観閲終了後に行進する団員たち
(H31.1.6、竹田根崎通り)

10月

秋季検閲

各地区隊ごとに別れて行われ、ポンプ操法や中隊訓練などが披露される。

11月

防火パレード

火災予防週間に合わせて行われ、消防車両で市内を巡回する。3月にも実施する。

1月

出初め式

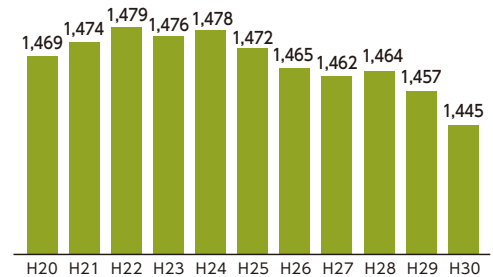
毎年行われるこの行事には、全団員が出席し、一年間の無火災などを誓い合う。



昭和20年に発生した「小浜町大火」の記憶を後世に伝えようと火の用心を呼び掛ける団員ら
(H28.1.15、小浜地内)

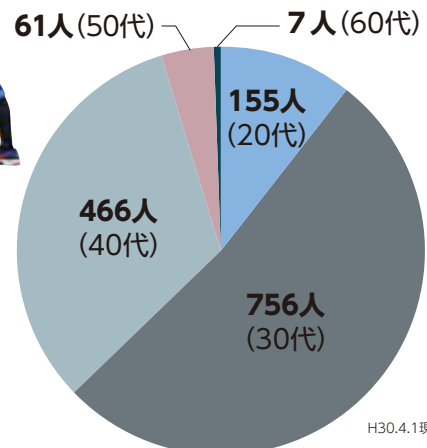
二本松市消防団 団員数の推移

(単位 人)



二本松市消防団の団員総数は、「二本松市消防団の組織等の関する規則」で1,492人と定められており、各分団ごとに人員配置されている。しかし新入団員の確保が難しく、仕方なく欠員を出してしまっているところもあるため、実際の団員数は年々減少傾向にある。

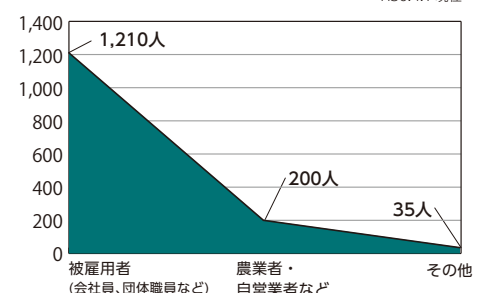
二本松市消防団の年齢構成



二本松市消防団の年齢構成をみると、30代が全体の半数以上を占め、30代と40代を合わせると、全体の85%近くになる。構成割合からすると、働き盛りの団員が多いことが分かる。

二本松市消防団員の職業別構成割合

H30.4.1 現在



以前は農業者や自営業者の占める割合が高かった消防団員だが、現在は被雇用者(会社員や団体職員など)の割合が約84%を占める。被雇用者の団員は時間に制約があるため、平常時や災害発生時の活動など、なかなか全てに出席できないのが現状だ。これらを踏まえ、団員が活動しやすい環境を整備するため、各分団などで活動内容を工夫し始めている。



消防団での人のつながりが、自分の仕事にも生かされています

安達地区隊第2分団第1部
部長

ゆ さ かずしげ
遊佐 一茂さん(40歳)
=自営業・平成19年4月入団=

学校を卒業してすぐ、民間のカーディーラーに就職しました。仕事が忙しいときに消防団の勧誘があり、実は2度ほど断り、3回目の勧誘で入団しました(笑)。消防団に入団してしばらくしてから、家業の自動車整備工場で働くようになったのですが、うちのお客さまは地元の人が多いので、接客中に火災が発生すると、『早く現場へ行け』と言っただけです。本当にありがたいことで、消防団活動へのご理解にいつも感謝しています。

私が現在部長を務めている消防屯所には、市内で1番多い37人の団員が所属しています。消防団は火災現場などでは勝手な行動をとれません。それは、下手をすると命取りになるからです。だからこそ現場では、団員たちへ指示をすることに最大限の注意を払うようにしています。

消防団活動は自分の時間を犠牲にする部分もあるため、負担が無いと言っては嘘になります。しかしそれ以上に、いろいろな人との「タテ・ヨコ・ナナメ」全ての関わりが増えるのは消防団員だからこそで、私の場合は、その人脈が仕事にも生かされています。団員の勧誘があった際は、ぜひ入団してみてください。



消防団員になれたことで、兄弟が増えたような気がしています

安達地区隊第2分団第1部
団員

さとう ひろとし
佐藤 寛利さん(32歳)
=会社員・平成30年4月入団=

私の父も消防団員をしていました。だから自分も、当然消防団に入るものだとし小さい頃から思っていました。逆になかなか勧誘に来てくれなかったので「早く入りたいなー」と思っていたくらいです。昨年4月の入団当初は、消防の基本動作やポンプ車の操作など、当然ですが分からないことだらけでした。しかし消防屯所内の雰囲気がとても良くて、先輩団員たちが本当に親切にいろいろ教えてくれ、すごく感謝しています。

消防団に入って感じたことは、団員間の仲間意識がすごくあるということでした。困っている人がいれば、話を聞いてあげたり力になってくれたりといった具合に。消防団はただの知り合いではなく、ちょっと踏み込んだ知り合い(仲間)を増やせる場所なんだと1年間活動してみて実感しました。だからなのか、それまでたまに感じていた孤独感というのが、今では全く感じられません。

4月には新入団員も入ってきます。自分がしてもらったように、後輩団員たちにいろいろ教えられるよう、もっとたくさんのことを覚えていきたいです。



「よそ者」だからこそ、消防団に入るべきだと思います

平成28年3月退団

おがた しんや
尾形 伸也さん(44歳)=会社員=

安達地区隊第2分団第1部に8年間所属し、部長を2年間勤め退団する。

思い切って消防団に入団して本当に良かったー2年前に消防団を退団した今の私の率直な感想です。

私は結婚して子どもができたのを機に、今住んでいる行政区へ引っ越してきました。いわば「よそ者」です。長女が小学校へ入学し運動会を見に行ったときのこと。地元消防団の人たちが法被を着て集団で運動会に参加していたので、正直怖くて近づけなかったのを今でも覚えています。

消防団に入団したのは、その翌年のこと。長女の同級生の親からの誘いがきっかけでした。仕事も忙しく悩みましたが、よそ者だからこそ、地元に積極的に関与したほうが良いと思い決断。あれから10年以上が経った今では、地元にとくさんの仲間ができ、違う行政区との付き合いも増え、昔からここに

住んでいたような気がします。

消防団を退団してすぐは、「火災のサイレンが鳴ったらすぐ現場へ行かなければならない」という使命が無くなり肩の荷は降りましたが、やはり物寂しさを感じました。これからは消防団OBとして、現団員の活動を陰ながら支えていければと思っています。



尾形さんが退団するときの屯所前での集合写真。最前列2人が退団者の代わりに入団した新入団員で、2列目スーツ姿の2人が退団者(尾形さんは2列目左から4人目)。写真に写る全ての人が、尾形さんにとっての生涯の仲間となる。



消

防団員は皆、それぞれ仕事や家庭を持ちながらも、一朝有事の際には現場へ駆け付け、また常日頃の予防消防活動など、地域に根差した第一線の部隊として活動しています。団員たちがこうした活動を続けられるのも、職場や家族、地域の皆さまの協力・支えがあつてこそであり、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

二本松市消防団では現在、1445人の団員諸君が活動していますが、二本松市の地理や現在の災害発生件数を考えると、決して多くはありません。

私が入団した当時は、周りに農家の長男坊が多かったこともあり、団員のなり手がたくさんいました

が、時代が変わり、今は新入団員の確保が大きな課題となつていま

す。いろいろな対策を考えてはいます。が、何といつても一番は、現団員たちがみんな仲良く楽しく活動できる環境を整えることだと思つています。『消防団活動は楽しい。』そう団員たちが思えば、今の時代、その情報はすぐに拡散し、『自分も消防団に入りたい。』という若者が必ず増えると思ひます。『昔はこうだった。』ではなく、今の時代に即した体制整備により一層努めていきます。

団員確保でも一つ重要であると考えているのが、女性消防団員を増やすことです。高齢化社会を迎えている現在、一人暮らしのお年寄り世帯が今後ますます増える

時代に合った消防団でなければならない

二本松市消防団 第8代 団長

菅澤 傳治さん(68歳)

＝農業・昭和47年入団＝

昭和47年、21歳で安達町消防団に入団。その後、部長や指導員、安達地区隊長などを歴任し、平成30年4月に消防団長に就任。福島県消防協会監事などを務める。

ことが予想されます。そういった状況の中で女性消防団員には、女性特有の優しさやきめ細やかを生かしながら、これらのお年寄り世帯を個別に訪問し、健康状態の確認や雑談を交わすだけでも予防消防につながると思つています。

消防団とは、自分や家族の時間を削つての活動であり、悲惨な状況に遭遇するなどの厳しい現場もあるため、決して楽なものではありません。しかしほとんどの団員または退団者は、『消防団に入ったことで、人とのつながりが増えて本当に良かった。』と口を揃えます。これからも「自分たちの地域は自分たちで守る」という消防団精神の下、市民の皆さまの負託に応えられるよう活動してまいります。

消防団員の情熱と使命感の大きさに感動しています

消防団の皆さまには、本来自分の生業(なりわい)を持ちながらも、地域住民の安全・安心のため、昼夜を問わず献身的に尽力されておられますこと、心から敬意を表しますとともに、広域消防に対し格別のご理解、ご協力をいただいておりますことに厚く御礼申し上げます。

さて私は平成9年度から3年間、縁あつて合併前の消防協会二本松支部の事務局を担当させていただきました。その時、消防団の皆さまの「地域を守るのは自分たちだ」という情熱、使命感の大きさに大変感動した記憶

があります。

ボランティアである消防団の皆さまがこんなに頑張っているのに、職業消防人である自分がいい加減なことではできないと思い、一生懸命職務に努力させていただきました。

現在、消防長という立場になり安達地方の安心安全を担っているわけですが、あの時指導いただいたことが糧となり、現在の自分があると言っても決して過言ではないと考えています。

消防団を取り巻く現在の環境は、社会の多様化等によるなり手不足や活動の制限等、大変厳しいものがありますが、「地域を守る」という崇高な使命の下に、今後とも積極的な活動をお願いするものであります。



安達地方広域行政組合
消防長 原田 眞作さん



上の写真は、訓練後のレクリエーションとして行われた、各部対抗ソフトボール大会の様子。下の写真は、ソフトボールの試合中に、女性防火クラブによる炊き出し訓練で調理された焼きそばやカレーライスをおいしく食べる団員たち。

消防団の昔と今

消防団員たちは、新入団員の勧誘に毎年頭を悩ませています。地元に残る若者の数が減っていることも大きな要因ですが、それだけではありません。以前と違い現在は、地元に残っているのだから消防団に入らなければならないという意識も薄らいできています。

たしかに昔と違い、農業者や自営業者よりも会社勤めのサラリーマンが増えているため、地域とのつながりを持つ必要性が減っているのかもしれませんが。しかし、自分の身は自分で守ると同じで、自分たちの地域は自分たちで守らなければなりません。人は一人では決して生きていけず、この地域で暮らしていくと決めた以上、地域とのつながりを持つことは非常に大切なことであり、必ずその人の人生にとってもプラスになるはずです。

消防団員になるといつのこと

消防団員に課せられた使命は、地域住民の生命・身体・財産を

守ることです。夜中の火災現場での消火活動や仕事を終えてからの火防・規律訓練などを通して、課せられた使命を全うしようとする団員たちの間には、苦楽を共にするからこそ得られる絆が芽生えます。ある消防団員が話していました。

「消防団というと、毎月1日と15日は屯所に集まらなければならないなど大変なイメージがあるかもしれない。人付き合いが苦手で、仕事が忙しい人にとっては、そのイメージがあるだけで、絶対に消防団に入りたとは思わないと思う。しかし実情は違います。仕事があつての消防団活動。仕事を第一に考えるのは当然のことです。それでも毎月の定例会には、仕事を終えて夜9時過ぎにいつも屯所へ顔を出す団員もいます。それはなぜなのか。それは、団員たちの居場所がそこにあるからです。職場で仕事をしていると、職場の人以外と付き合う機会が少なくなってしまう。特に結婚して子どもがいたりすると、でも消防屯所では、職場などでの利害関係が全く無く、先輩・



女性消防団員も 募集しています

二本松市消防団では、女性消防団員を募集しています。女性特有の優しさやきめ細やかさを生かし、消防団活動の充実強化を図ることを目的としています。全国では現在、約2万6千人の女性消防団員が活躍しており、二本松市でも4月より、女性消防団員が新たに誕生する予定です。

応募資格 市内に居住する18歳以上で健康な方

活動内容

- ①消防団・消防署が行う主要行事への参加
- ②火防・防災に対する啓発・広報活動
- ③災害時の後方支援

処遇

- ・身分は非常勤特別職の地方公務員です。
- ・報酬は、条例に基づき年間一定額が支給されます。
- ・被服は、作業服等一式を貸与します。

興味のある方は、地元の消防団員または市役所・各支所の担当課へお気軽にお問い合わせください。

◎問い合わせ…

生活環境課市民生活係

☎(55)5102 Fax(22)4479

消防団員にとって毎年2月は、4月からの新入団員を確保し、市役所へ報告する期限の時期です。団員たちは昼夜を問わず、地元に住む方の家へ訪問しながら、団員確保に努めています。勧誘を受けた方は、話だけでもいいので、ぜひ聞いてみてください。



『みんな消防団に入ってください！』消防屯所の入り口扉の前でポーズを決める団員たち。消防団の良さを、少しでも多くの人に知ってもらいたい。そんな思いから、取材の際に無理なポーズをお願いしても、団員の皆さんは快く引き受けてくれました。

消防団員だからこそ 得られるもの

同じ地域に住む人は、スーパ―やコンビニなど、多少なり

後輩などもあり関係ありません。本当に気軽に皆と話せる場所なんです。入団当初は知り合いも少なく居心地があまり良くなかった屯所も、時が経つと、自分の家と同じくらい居心地が良くなります。愚痴も言い合えるし、相談にも乗ってもらえる。そして全く違う仕事をしている人たちが集まる集団だからこそ、いろいろな情報が得られ、自分の人生にも役立つんです。自分に何か困ったことがあると、あの人に相談しようという選択肢が格段に広がる。消防団に入ることが、私の人生の宝を増やしてくれました。」

とも日常どこかで顔を合わせます。そのとき、挨拶を交わすだけであれば、ただの知り合いに過ぎません。もちろんそれも大事なことです。立ち止まって挨拶以外の雑談を交わせるのが友人としての証であり、消防団とは、そういった仲間を多く増やせる場所なのだと思います。消防団員として活動することは、それまでの自分の自由な時間をせばめることになるかもしれません。しかし団員として活動した結果、彼らには一生の宝ができるのです。かけがえない「仲間」という宝を。

消防屯所の扉を開けると、そこでは多くの人たちが待っていてくれます。それは、その先もずっと付き合うことのできる、大切な仲間たちなのです。